

三〇一会・シベリア回顧録

新潟県 中野 鏞一郎

一、収容されるまで

私は昭和十五（一九四〇）年徴集、翌十六年七月朝鮮會寧歩兵第七五連隊に入隊、終戦は北朝鮮鐘城の山で陣地構築中で八月十七日満州トモンで武装解除を受け、徒歩で延吉の収容所に入った。九月初旬徒歩で飯島さん、大原さんと一緒に約一週間かけてシベリアへ行った。九月汽車輸送で奥地へ送られた。着いた所が三〇一収容所であった。壊れかけた囚人収容所で十月の初旬で寒かった。

二、収容所と主な作業

三〇一収容所では大原小隊で伐採、運搬、整理の作業をした。大原小隊は原隊で編制したのが基になったので皆よく頑張った。三〇一収容所は飯

島さん、木下さんほか各隊長が努力していたのでロシア側の信用が絶大であった。昭和二十一年三月カテゴリ検査があり三級になり、更に奥地の四〇三収容所へ転出した。この収容所は下士官、准士官ばかりであったが、大隊長高島少佐（関東軍参謀）が誠に人格者であった。またソ連側も一目おいていた。作業は密林を伐採し道路構築が主であった。八月中旬大隊はアムグン河を渡って更に奥地へ行き道路構築鉄道建設に従事した。（四一三収容所であったと記憶する）

三、収容所より帰国（ダモイ）

昭和二十三年七月ダモイの命令で列車を花で飾り出発した。途中三〇一収容所の前で停車したとき大原さん、飯島さんはじめ皆様元気で健在であることを聞いて懐かしく嬉しかった。（しかし帰国ではなくライチハの収容所行きで炭鉱の露天掘りやこれに付随した労働に従事した）

越えて二十四年七月初旬ようやく帰還命令が出た。七月中旬ナホトカに着いた。ここでは順列に

第一、第二、第三と收容所を通り、昭和二十四年七月二十三日恵山丸に乗船、七月三十日復員。七月三十一日郷里新潟県村上町（懐かしの故郷）に帰り当日は駅頭に埋めんばかりの出迎えの人と日の丸の旗を見て感激した。

シベリアの思い出

新潟県 小林 常 太

一九四五年八月十六日、北朝鮮トモンを見下ろす小高い丘陵地のある鐘城の幕舎の前でT小隊長が整列した私たちに「今日から我が国に軍隊はなくなつた」と敗戦を告げた。前日まで大隊砲観測隊員だった私は、ソ連機によるトモン陣地空爆と我軍高射砲の反撃を小高い丘から観測機でのぞきながら、いよいよ一日、二日のうちに戦闘状態に入ると覚悟を決めていた。そのとき戦闘体制解除、下山、小隊幕舎に集合との命令に接したの

だった。これが一つの結節点だった。その後苦難の新しい道のりを歩むこととなった。十月中旬ころ荒涼としたシベリア大地の三〇一收容所の地に約千人の戦友たちとトラックから降ろされ、化け物屋敷を目の前にした時、呆然と立ちすくんでしまった。ここからどうして帰国するのだろうか？と。私はここまで来てもまだまだそんなことを考えている二十歳のお人よしだった。旧軍隊の延長線上での抑留生活で軍隊はなくなつたといつても階級支配は続いた。空腹と寒さの繰り返し、虫けら一等兵の苦難は続き、私は三〇一收容所を翌年春押し出され、再びこの收容所に戻ることはなかった。

帰郷を夢見る日々の中でのラポータ、民主運動の激動をもろに受け、その後いくつかの收容所を転々として最後はコムソモリスク市内の收容所だった。

ここで例の「スターリンへの感謝状」なるものを書き残して一九四九年八月帰国している。今、